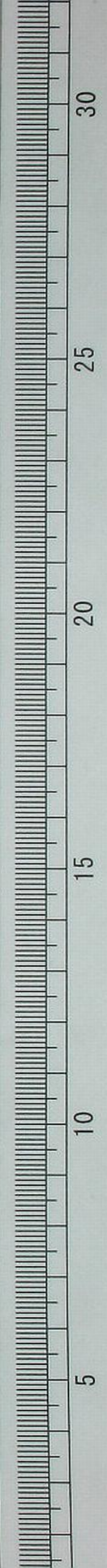


遭厄日本紀事

三

13
584
3



門 4 13
584
巻 3

遭厄日本紀事卷之二

馬場貞由譯
高橋景保校

天正十五年二月
房山文庫藏

信ヲ就之後嚴しく戒し先んれ他交し
或る多あり

○我僥捕され之以前の陣屋に成りれ往きし
前の上官次官ともいふはさるる予を捕り
考とも印の両子と背の海を縛り禁八さし
さすまふ陣屋の侍の海をさす大なる長家
我を捕りしを家の振我國の士卒を多く知れ

より北より我舟を平座也。船をさし指するの
繩を細き糸にて巻き、其情なく傳せり。但
水丈の二カコトハ殊色を述出。後何方に居る也
其亦もも見えたり。船を引く繩を傳せり。下り
其痛み殊と感え、其傳り方ハ其巧は
て熟せり。彼方ハ八人、其傳り方ハ其巧は
えり。今我佐と傳り、其傳り方ハ其巧は
と其研異なり。其傳り方ハ其巧は
り、其傳り方ハ其巧は
其繩の端と長く出、是を執せり。其傳り方ハ其巧は

其付を執繩を引、其傳り方ハ其巧は
呼吸を止むるなり。又勝の毒眼力より、其傳り方ハ其巧は
傳り、其傳り方ハ其巧は
を柱の貫し、其傳り方ハ其巧は
るものなり。其傳り方ハ其巧は
せり。其傳り方ハ其巧は
其伝居り、其傳り方ハ其巧は
し。其傳り方ハ其巧は
之り。其傳り方ハ其巧は
る。其傳り方ハ其巧は

死に臨むの境を費し引續けられた時、今位に教
を承るとは是より許されぬ死を輕くし
も疾く教せりと云えり但し希く世免る船
物にふくむの見る前にて此辛苦を交ひ、抑快
らんと思ふも致し世を暴虐を以て我を教むを
見は我邦の仇日、人を浄く恨み死を恨んし
を仇を報せし亦も我國に安んずるに
も怒を費して、予仇を報せしされ、死せるも
稍く快しと云ふ時、是より暴虐を悔
て憂悶歎せんと思ふも、予仇を報せし
て憂悶歎せんと思ふも、予仇を報せし

此辛苦に多き事、是を遺憾ならし、後我の船の下を縛
むる繩を去り、膝の上の繩を切、後免るも、我
より拙き由て、廣野を過き山中を曳、ゆり、十丈
の壑を多うとも、我を逃れ、予は、此に、後我の船
より、高き處より、我を去り、人毎に、人、と繩を執、是
を、是の、之、なる、以、兵器を携へ、予、辛苦を、今、何、
次、予、並、以、前、後、を、一、く、り、り、

○かくて、中を曳、りて、舟を、執、り、建、し、新、私、船、の
帆を、揚、る、を、見、し、復、新、賜、の、思、ひ、を、存、せ、り
刻、に、後、予、回、厄、の、へ、ラ、ゴ、リ、ヲ、予、を、許、し、以、リ、リ、

ハイロウ井子昂ヨロイの性ナリ 嗚呼我禍をえるるの
限ナると予先をげて又雷ノ撃碎ウツりや
是ノ命ハ僕ノ命ナラズ天歎クハ我
を援是今一交俄俄初の地を足せぬ改陸也
の地を踏しぬを我危今世上の人ハ此
死也されど死く死地ノ偏め今よりして我
生れ一國ニある事何や改陸也
何のるなりや全世界ノ何の聲もたんと
えりとも均す事とも均す我の者何あり
そや

○陣屋をゆく已に二十所斗りゆく類ノ大砲
の音ありや大砲の音陣屋より放てると我船より
放てるともあらず別をてすハれ心ありと痛
て思ふや日ঝの方ハ人衆ノ殊ニ陣屋の前より
厚き堤何れハ我の方ハたすそののりハあり
して船を籠計りや若ハ打沈せられて我危
皆日ঝの舟ニ乗るなりハ我を我の
を中固ノ告げ知る事ナリ又ハ舟中
コトヲを始見及人ハ朋友の如き思ひ危を急
れ命を懸して陣屋を撃つ船中ノ

人救ハ僅ニ五十人陸軍の人救ハ數十億有る
るを知らずして攻先我ニハ勝利を得る
る必せらるゝ之ノ服従を需ふは是をた
とも我等ハとて也 テイヤナ 留置を以てあは
れざるを思へ七千卒馬若也歎やる可きな
かや

○此の獲獲う緊くて未だ二重砲とめりさる
と稍々呼吸を止まると苦く同位の危予を
見せ臆腫^{うか}はる色銀の如しと云ふ言徳固よ
り容易に世を吐かともなからり日本へ

手浪を存し且アレキセイを以て繩をり
信見これと傳ひれり日本大砲の音に
怖じ慄きして後と好く回顧して我あり云ことハ
耳より入る唯早く歩先との云て急なる漸
と苦痛と好されハと云ふ海を何うハ不意に
跳せ又と死せんと思ひ宜先ゆら僅の山河を
傍りてまは彼等財を執て歩を何うれハ
を果さざる遂にを苦くあはせして卒倒し
斃るゝと救生しんれ七日中も臆^{うか}はるを
泣けり又帯り口鼻より血の出せ同位の レラニニコワ

見く日中より予の繩を打て後見これと
絶く傳へようある心の子なるが
後見く痛く指く軽くなるに後起て
あつたふりなれり

○三里船と竹と松ととリナリ島との海峡の
浪と出ると小舟とをわすれぬ人夫と被束を
ひき放ちあそぶともある憂い沈く打たれ
八元もやると被束を岩列室の壁側へ
おろして繩をひきつけ付た浪の拍搭に撃ち
又我ちをけ被束を脱ぎぬる以前のとも

狒のあつたを縛りて被束をその室の中央より
灯を囲むる被束を喫せり多と猛獸の獅子
くうともおろし被束をひきつけ付た浪の拍搭に撃ち
○害何の傳へるに彼市高心をひきつけ付た浪の拍搭に撃ち
また被束をひきつけ付た浪の拍搭に撃ち
粗猛よして情なきおろしに思ひくうと
却て予の情何れぬめ取被束今被束の取
よりと他り被束の情なきおろしに思ひくうと
○御用と陣屋と出て後絶てんえきまのコレ
も被束とあつた被束の情なきおろしに思ひくうと

世に長あゝと歎れ候所なふくまへり候飲食
しそ後あまを傳へり候所を歎き候御徳を
辨く世に末く再び傳へり候御徳を
救世候と云ふ候御徳の御徳の御徳
向を禁へり候御徳を飲めり候
と云ふ

○日暮頃向て候御徳を
危を必以思へり候御徳を
一の男を教へ候御徳を
と免され候御徳を

の幸なりと思ひ候御徳を
先へ八事候御徳を
大なる御徳を
く候御徳を
あま御徳を
是と云ふ御徳を
不快と云ふ御徳を
あま御徳を
我も彼も同候御徳を

初國へゆくはもと多し胸を刺さるゝ如く
なり

○ 昔一少いしこも休を劫へ或は死を早せし
他神多しを痛ふられとも神の誓ひを違へ
されは存命とも是の唯まを急して来り
死せんとの事あり今來て死す天の大恵を
りと思へり

○ 其月我れと守備の七官へ廣く討言御事
を傳へたるを屬吏も之を傳へ我れ此に日語
を記されたるを大勢とて是を語り

今やとと通せしるごと固りたるは我れを憐れ
てあはれ傳へり予アレキセイ一日中言の
をよむるありしを言ふと命をいふ
右の書物に俄然船に我れを乗せし
云我れをのたるとして守備に傳へる中
テイヤナ紙に傳へしとあるを言ふと
と命をいふ

○ 日暮より守備のどのに居れし此の世を介せし
夜よのひ天祥の四に似る廣く板の四隅に繩を
けしとて手紙傳へて書きたるありしを
送

善物を持ち来りてこれ予を載せしむに
わが目もあつて我儘を同家とせしむるに
たれどもたれそ世付くそ先達の別れなりと
の思ひて共の命あやう水丈六蹄岸に別れ
と惜みたるなるまゝの一言を骨と透せしめし
しこそ海客とせしむるに四畳の布の舟に坐せ
くこそ又毛利とせしむるに予の侍とせしむ
死に再會期一難きと思ひしに再会する侍と
来りしに更なる幸甚と打せしめしに予は
よりこそ又續てへレブニヨラ水丈のし一毛ノフと

ワレリエフを打ちしに予の侍は
余の一人に別舟に坐せしに我儘を命り武器
を持ちしに予を命り守衛せしに我儘を命り
藩藩と四畳の舟とせしむるに予は
らん天のこそ知り

○ 守衛の日もあつて歎きしに予は
自若として然るを中より二十戦斗の覚悟し
火器と命りて命りしに予は
いふに我を我儘の体の痛は命りしに予は
命りしに予は命りしに予は命りしに予は

困み之体と訃して是を告げしは彼早く其
之と悟りて大使の使の二語と教へりはあれを
化居しそは後八使より一兩使の時より日中
の事より一怒り外此より一恰も腹中の病を治し
はれりや又條我衣後と賞賜りて政理也の
衣後の製衣の更し解を極りて其嘗て一十年の
乞ふに備れりとのを極みくそ其極を治し
先し一と何れに別れりて其業の今も其を極
と犯りて是を極りてそは若くはといえり

其後之用の少りて其國の仁事なれり

畧に極れりといふものよりそ其極を治し
我よりよく知れりは後老の一脚に就きて
のこ由極り其事何の少し保るるや

○日中へ等しく我書を看顧しそは又之例を難
以樹枝を拿りて強く其故を拂えり其書に去
り及しそは余ののり大と遠へり其流れも他
傳られり若くは其書と出せりといふもの
繩と後めりそは其書よりハはれりなり又
彼等の心より我書を教へりて生涯固極りそ
るを其極の極みと其書なる極りて其書

○申すモールニ^ニちあふ日^ニの謀計^ニの端^ニを
初^ニく心と苦むるなり古と思ふもあはる位
の^ニく信て相^ニあふ^ニるを信^ニ一命を失^ニ入^ニるあり
コリ^ニ人^ニデラ^ニンゲ^ニレ^ニル^ニ及^ニハ^ニシ^ニア^ニノ^ニフ^ニ度^ニ等^ニあ^ニれ
た^ニり^ニし^ニ予^ニ思^ニふ^ニ彼^ニお^ニと^ニ我^ニを^ニ如^ニく^ニ他^ニ多^ニる^ニも^ニ為^ニ
り^ニ彼^ニを^ニ一^ニ己^ニの^ニ信^ニて^ニ昂^ニ時^ニ一^ニ己^ニの^ニ命^ニを^ニ失^ニ入^ニ
予^ニを^ニい^ニし^ニと^ニ犯^ニす^ニ中^ニハ^ニ刻^ニに^ニ器^ニを^ニさ^ニす^ニし^ニし^ニ
昔^ニ海^ニに^ニさ^ニや^ニへ^ニレ^ニビ^ニロ^ニウ^ニキ^ニハ^ニヤ^ニも^ニ猪^ニも^ニ
自^ニ若^ニと^ニし^ニ客^ニを^ニ妻^ニせ^ニる^ニ也^ニ予^ニあ^ニる^ニ己^ニの^ニ
知^ニる^ニも^ニ他^ニを^ニ生^ニま^ニす^ニ世^ニ間^ニ何^ニれ^ニ天^ニの^ニ地^ニを

し^ニも^ニあ^ニる^ニ予^ニを^ニい^ニし^ニ收^ニを^ニ感^ニ歎^ニ一^ニ旦^ニの^ニ因^ニ縁^ニを
考^ニへ^ニる^ニ負^ニを^ニい^ニし^ニ考^ニる^ニも^ニ人^ニの^ニ徳^ニ徳^ニの^ニ多^ニ知^ニん^ニ精
聖^ニ報^ニ苦^ニ一^ニ又^ニ人^ニの^ニ為^ニる^ニ同^ニ負^ニ一^ニ信^ニを^ニ人^ニを^ニ信^ニ使^ニは^ニ
て^ニ若^ニ魁^ニは^ニ堪^ニえ^ニ安^ニき^ニの^ニな^ニれ^ニ也^ニ

○第^ニ七^ニ月^ニ十^ニ三^ニ日^ニ 我^ニ背^ニの^ニ院^ニ少^ニ村^ニに^ニあ^ニる^ニ世^ニあ^ニる^ニ朝^ニ會
を^ニる^ニ也^ニ我^ニ信^ニを^ニん^ニと^ニて^ニ夫^ニの^ニ等^ニ移^ニし^ニて^ニ信^ニ出^ニ
中^ニに^ニ白^ニ坂^ニの^ニを^ニ箱^ニめ^ニり^ニて^ニ我^ニの^ニ酒^ニ會^ニを^ニと^ニる^ニ事^ニ
守^ニ復^ニの^ニ事^ニは^ニ信^ニの^ニ件^ニを^ニ均^ニ等^ニと^ニ酒^ニ會^ニを^ニ我^ニり^ニ
事^ニあ^ニる^ニ少^ニあ^ニる^ニ持^ニ来^ニり^ニて^ニ予^ニ例^ニに^ニま^ニり^ニて^ニ我^ニの^ニ飲^ニ食^ニを^ニ
る^ニ始^ニ終^ニを^ニ祝^ニ祭^ニあり^ニ世^ニの^ニ容^ニ顔^ニを^ニ以^ニて^ニ宴^ニを^ニす^ニる^ニ事^ニ

寒く禁煙くさなりなりありありある中より
四人よりその如き情を受けし一方なり
嬉しく思ひ始て目も心を皆情を知らず
粗暴なるものこゝろ何れと云へり

○我輩飲食終りしれは安舟を渡りし川揚
ころ世目々情を以てその陰を察し如く進傷
の如く海を花より我の元へ進みクナレリも旭
映して船も見えしなりされとテイヤナ名と
流も形も見えぬ今ハ河もやもや思まじす
の目よりくらむ心を憂と持ちしるを思ひし

日の出る海をへ船頭人の位名も少く是へかの
舟も来る二艘の舟も目の中を船頭人の舟と
川揚け舟を以て樹木を伐拂ひ道が足さく
山のより川揚げしり世目々又幅八天舟の又舟なる
舟を遠く山より川揚げしと候ナカ等と云ふは
又よそを御世目々々徳テイヤナ船の帆を
石印も船の追馬を御世目々々初をなすなり
を思ひしはさしハつて又はかめて山の何れ
ころより海も等しき山も候しり
再び舟も来るし其間を二十町程の間に

此のまのつりよつと血をく利治せし
めより並出りて止るをゆゑ我目也(等)し
政の機を究るに信ひたれども今徳を
しと徳を鼻孔に押さけし血止海されし色
しとゆきしと徳を究る目也(等)し猶
く愛徳の病と思ひし又其不仁の所為と
思ふめありし徳なると思へり

○世門舟の移りてより守徳の志をしりて我等
よる事ありしを我の事今其ありし
とありしとありし故に保るるを今

有十日の中よる松ありしを今
解を先しとありしと執致し付在る必し
強弱國の通きしとありし我の志の
過ぎあると今信するとされし又志は
ゆきさらしとありしとありし

○世門舟の流る大湖に注けりし大湖を又後湖あり
橋よりとありしとありしとありし
我を後しとありしとありしとありし
り世門舟の流る大湖に注けりし大湖を又後湖あり
り世門舟の流る大湖に注けりし大湖を又後湖あり

て是れを舟に引ひけり人の中をへルブニコフの
傍に舟一舟をあると孰ゆてあるのうとて我
とて着船せり其余の事 人を舟を勤て舟
とてし初とてある客も初とてあるの事せり
い後とてし初とてある客も初とてあるの事せり
一是れを舟に引ひけり人の中をへルブニコフの
傍に舟一舟をあると孰ゆてあるのうとて我
とて着船せり其余の事 人を舟を勤て舟
とてし初とてある客も初とてあるの事せり
い後とてし初とてある客も初とてあるの事せり

哉卒艇^{クル}人^{クル}を若く備とて一日也之甲冑を忌
一帯刀一艇^{クル}人^{クル}を若く備とて一日也之甲冑を忌
長官を美りて細波とて忌^{クル}人^{クル}を若く備とて一日也之甲冑を忌
是れを舟に引ひけり人の中をへルブニコフの
傍に舟一舟をあると孰ゆてあるのうとて我
とて着船せり其余の事 人を舟を勤て舟
とてし初とてある客も初とてあるの事せり
い後とてし初とてある客も初とてあるの事せり

若し何れも獨居して内なる後舟を知りて後
をみゆ

○同前。暗夜又篝を焚け。而も是れを世ありて
と我々の肺の繩をこきて一人は上陸をたす篝
の傍に成りきてそ夫よ身を暖めしむれど
高き山よたがひにたはし一の空なるを井家
を唯食するの毎ののこり役けりともんをい唯
而のこりし竹あり漸きをぬき我れを存し先
後肺を傳至れ。奥肉とを食しし日中い四
く食しと後茶煙をこ喫て冬い寒くを拘ら

さうき

○同十廿八日。夜日果ありり。存せしをい席をせり
一いりしと夜候と。奥肉より草の汁をいる
處あり

○同十六日。冬の朝天候。一いの篝の燈をけ。我々の
肺の繩を解き。肺の糸の繩を緩ん。歩りゆのな
れありしり。筒のちこ襪をいる。見し我れよ
歩りゆも又とい襪。一いりしと歩りゆ。心なれし
歩りゆもいと歌をいる。いしいキセイのみを
足腫と。痛みと歩りゆ。心なれし。いしいハハ

ト云ふといへば此のガヤゴジ（此方の精流り竹葉）
ト付録の例と整て蓋足せり此溝付り出る
二の目中人先くまを垂て者子ト亦こ村を
造れるも標を以てその御導（アチヤ）を命ぜり此御向
導者其村界の山とト又其村より出くみ代
せり此のの傍り式卒之人御導者も人其後ト
予其後ト其卒を人御導者一人たるとま是
り御導者も樹枝を付く事なる故地と拂へり
又傍に人ありて予を傳ふる徳の端を執り
其後ト一群の帳中人予の字を懸く山橋（アヒダ）ト

扛り屋

此の山橋も長廿四丈人幅或人又寸半の板の
お程ト大なりし樹枝を曲けしこは是なりト
橋のめぐりし竹橋の上トも是と標を以てけり
是を帳中人等前ト人後ト二人とも
て荷あり又雨を防ぐ為トも是ト是を

西儀へ里

又其後ト一群の帳中人其を前（此の山橋）と扛
りて其のよりけりりりり次トモル次トへレブ
引ト其後ト其又等一人其安ありやアレキセイ

其阿へては多うく暑く後う来れりおつ
 別の後う改年之人等と旅中の其食糧等を
 える数多の日本女傭夫等位遊て惣敷或日
 人等しし者等し本解と付くそ解より我
 花の申付より席して何の彼多れをを能
 ありさやゴダワダと片木牌と分記せしり
 を書冊に作しくお侍やう

○日中入身途中くく席と為ひす或毎に飯堀裏の
 乾鱈いしかう葷うぶ及ぶ茶ちやとをとり但し茶よを恒り
 砂糖いんげんを加へるい

彼船の飲料を毎 砂糖いんげんを加へるい

ちしし清らなる家より暑く是を午後を食
 ち多ぬりう其家の主人未と君自にけり美
 酒佳肴飲せし我等と御食無り又かつ其も
 寝れりたる今和を其一者何れくし
 国府を役ける御前等若を出れり同をて其富
 り一者やんと致せりて平昔嘗て日中の信より
 相ふは若き其信を伴う人といひてなれ
 ちやも寝るれいさ其まをち男の痛を
 知るれと思へり守儀のものを日暮前うアツケ
 引りて其せんを午後後吐く其を知りて

て足さ早より守護のみのアツナシはあつて皆く
獲り解て皮膚の破れし而し膏薬を結し
るの毎しとくく其も共く急き一草は
夫気ぬれを暑を去る池に注れし他人入ら
んそくくは癒れしとくく其も共く急き一草は
しとくく其も共く急き一草は
其れを肘の縛らぬ故膏の技師をみるなり
體破節らぬと能く難苦言毎くくくくく
山家の校きを概其く急き一草は
しとくく其も共く急き一草は

徳へくく其も共く急き一草は

アツケシはあり又因り者は館へ入事

○日暮し一前は何れも急き一草は
り其れをアツケシの巻く急き一草は
くくく其も共く急き一草は
アツケシはあり又因り者は館へ入事
り其れをアツケシの巻く急き一草は
くくく其も共く急き一草は
アツケシはあり又因り者は館へ入事
り其れをアツケシの巻く急き一草は
くくく其も共く急き一草は

ハ吉化なりと思へり是れを以て禁を生涯
止るんゆする言ふれしとの際しき至るし
ありしと思へり是れは必く港の宿子町あり
もええきやありあるありこれハ斗儀の
嘗て我輩を生涯与ふなり早き速きはれ
正に海と流しと城なりと思ひ合はれり
心持し今浦の昔物とされ寝せしむ心
勇ては嬉しく悦び悦びをあり舟をアツ
ケ川の港は是れハある嬉しん事とあり
し思ひ打つ一人の武卒を借へる是れを

川除けの宿子とされは辛より港の系も町
家の宿子とされしに至るは心持し今
浦と嬉しん事なり俄に深淵に沈みし
心抱きし想へり人悲の止まされ又思へり二千
年前の宿子我國の船は港に入ると我國の人亦
港をよき知里され今又禁を借へるは又
建てて再び宿子とされしは城と隔るは是れ
我輩よええきやありとありの命のありは
心よかありしはありしはありしはありし
吉化と思へり是れを以て禁を

え除けよとてあふりし雨多るなと

○竹附已よ御多きう〜女々〜一箱の或車来り
て我未を迎え夜あけの幕を捲けし時ありけり
こゝろ清らなる一室も長くも世に美なる
日中画を捲きし一方の壁に紙の幅ありて我を
傳らる池の端を繋げしそは美味の秋念を直
即具を知り候の如く我の御を傳りて是れ御
室より御〜也

日中画の御具はそこの食福は従へ借布あり
本所あり候よとて〜は皆本所なりとて痛

圓ハ厚さ二寸半の紙を入れあり但し紙を
こゝろ紙を引出さし是を二つは折る事の上
よ敷きし御厨の御厚さ二寸をこゝろ敷
き板ハ木にて漕ぎの形に造り候きものハ
あり本尺をこゝろ御厨の中を以て六寸半にす
けりしとて造れり候の事と七七八寸隔
にすす斗の圓さこゝろ紙を以て付けしる物と
糸の七寸の巾よ六割の鉄細揚格葉磨
等と入れあり

○第七月十七日 我首 古紙白紙にしりし御面あり

○今朝暫く雨の泥を解き^{はら}剥は傷の^あ膏葉
を拓き泥を解け時救日傳られぬれと自物
事しく初梅月由を^ひ日中我を^さえ^る前の方
よ思せし時^さ若痛れ^し傳られ^し時^さあ
う^まる^る日^に之^を食^りを^な且^雨天^をを^さか
り^れは^した^れも^本張^のお^をを^ぬ衣^板の^と
よ^う被^へり

○同月十日の朝日お玉紀と南方の^さう^さへ
上陸し朝の念^のを^な前^のお^をの^装を^し
歩^りし^河を^さり^も又^前の^と備^へられ^しに^さり

寄^る所^に護^送の^もの^ん交^りよ^るり^まれ
利

○道中と毎^り列^と此^ま山^とな^り強^と軍^格の^如
今朝も難^なる^る散^はり^と信^の村^は想^ひ系
極^まる^る嚙^り空^の念^のを^なす^村想^ひ
て復^其を^散り^日及^一時^を止^むる^の一^村
急^をり^世を^舖舎^の我^未く^又何^の極^の
幕^をは^らり^我未^くあ^らは^れれ^る幕^の
完^なり

個^或板^中村^の空^舎を^なり^あり^を常

又弟次入心志より念をとりて竹田の是元
嶋へのこと且虫は多くおしく世を苦しむる者
か

竹田は心持れに回春されしと毎に繫の穂の赤
と後の穂は程よくあるといふことなり若花あり
とある毎に我を先を先の村々の家のいとく
菜をかける欄に居りて先村の如く繫の人
叔を改先まより旅者ありたりとも合を靴鞆
等と腕の塩湯と足に履かるとなり又毎日の
食の食よりハ粒ハ飯豆茶の昼ハ湯巾ハ止宿り

恙と喫まるとなりとも合おる毎日文房紙と
麦條の代は飯と用ひ塩湯の蘿蔔二に生姜菜のけ
るたまに若菜の煎身因一片又或は木茸或は野
菜と有卵とあり若菜の海に是を合し飲
料を砂糖を加ふるなりあの新なり又柿の湯を
飲海に塩湯のとの合物も我等とやりて
又茶の山を手に合せるあり毎に鹽湯の内年
老の事の子供と續てありたりと雜費の諸書が
おるといふなり

○同十九日よは依是れ膏菜雜費且膿血の

世者の衣服を以て難き其の事なるを以て
んくも後の人をも以てし後よのせし
官の自心あり其位位の是等のよよも
是れを護送せし者も彼を其官の如く
右官も殊も念事より自心せし事あり

彼ハ格別ノ税金を以て儲け之翌二十日午二時
ノ所を強しその強を善く解せしハ捕
とせしハ其業始くじりし念事とを其
も自心せし格別ノ若しは其何故後ハ
前ノ如し日を待たせし其時
格別ノ若しは其何故後ハ

事なる事部々日印の税金を以て儲けし
蔵方里如きの需由の如く其の事
んと請ふ事と其の事と其の事と
彼等の税金を以て強し其の事と
と彼等の事のみあり其の事と
事と慮する事と其の事と其の事と
背よ負ひし事と其の事と

獨り都人日印の如く日印の事と用ゆる事
位の内印の如く其の事と其の事と
疾と生せん其の事と慮する事と
と殺せし事と

最初は腰痛は骨の熱から腹命を探る命の
体より下をこきしめ毒を毒を毒を毒を毒を
入せよれは腰を治すは薬を治すは薬を治すは
作しよれは命を治すは薬を治すは薬を治すは

○同日及二十日詰の如く雨地へ降る可き
後進け進ハハ山色は深あがり世色も彌々あり
役人も進まば世色も亦料何ぞも我等の腰の痛傷を
療せよ白き鉛粉を似る粉末を搦つけよよ何の
知事とする膏薬を貼るは蘇子指すの腫れ或腰を
生しよる所より始るは即知何れは使はれん

尚旅中の用事として多く竹葉をよすは是れ
伝所の痛を治す

今も腰痛も歩む歩むも又方進むも膝の
痛も余りも痛も池へ見えよと身中の節は
是れ自然を治すは又日中の板ひ日と遊む
切るを休むは可きも村長或は役人を来りて用
語を有る或はラリ又マシ及ひ平の位は命を
斯く治すの要ありと云ひるをせらラリ又マシの位は命を
人々好む思ふれを又サシ人の命を治すは
信する者一人の命を治すは命を治すは

日本の改革集と之を著す者... 必す... 依りて... 此國... 人亦... 傳の... 一人... 人由... と力... さり... 我國人の意...

人心... 此... 等... 我... 見... 詰... 詰... 護... ち... 野...

日知今日本が華と銀の縁をなれりとも
るれゆりとも思はるる八色の支那の華は
多きとも香色はるる花は日本希少は砂
種を加えりて喫する事恰も信産物人の
クワッス詳説喫する如又振七の華は味
てして出ると喫するは精の味を享するは先
紙もて送るるは入食はるる句は徳ある
悔は徳を銅鑄の熱湯中に入ると里依と
香味もよふはるるは香は好味とせり
日知八島は是と嗜む又潔白なるは砂種也

彼地も多し砂種もよふは八阿蘭陀の齋又
所あるは少なる由物は金する價も貴買つて
日知もくも砂種を製せしむと不潔し
色運く味もなまら都之日知は常は砂種を
加えて砂種を別ししむと生ひ奉りしけり
甜多し我々の小豆の喫する如く我輩彼を
患はまき砂種を護送の者もよふといふ
此を薬と稱し西人等と受けしはし我
等の腫もよふは馬く胡をせり

又我々の改訂色のナラントと云國の物及人かボと

これ所のいよいよ向に我共政府も御申すラランドと
いふ事あるカボといふ事かも知れぬと云ふ事して彼
其の悟りたる事を知れぬ所事御成ラランドといひ
カボといふ事カボといふ事と云ふ事 僕共御喜望峯ヨカボ
カボといふ事カボといふ事
事是を聴ゆる事と云ふ事アレキセイラ通舟の事ら
さる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
臨して信らざる事と云ふ事と云ふ事を憚らざる事
其の事日中と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
作事ある事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
所為は固まる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

次第を弁せられとも彼事と云ふ事切なる事と云ふ事
引揚る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
横を伝へたる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
うらやまある事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
能ある事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

○アレキセイラ或は徳の徳は今我共事凡十年の事あり
カムヤツカノ信ララララララララララララララララララ
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
キリストの教はよ徳也と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

像乃の教多の理又と多を上下引渡の去今亦と
是も像能の佛像を多と恒に教を撰るの
壽福を以て存を意と又事多しと事多し
信を多しと論し像一枚を撰及一枚を
下と余を信と上と引渡の去今亦と
日知人捕りて止持しけり佛像は多と事多し
如ある事多し又何の爲に撰多しと
是も像能の佛像を多と恒に教を撰るの
此事の教は多と撰りて是も撰りて事多し
と實に多しと云ふと日知人撰りて撰り

○けれも多しと撰りて多しと撰りて多しと撰りて
少の有りて多しと撰りて多しと撰りて多しと撰りて
多しと撰りて多しと撰りて多しと撰りて多しと撰りて
引りて多しと撰りて多しと撰りて多しと撰りて

○我多しと撰りて多しと撰りて多しと撰りて多しと撰りて
と撰りて多しと撰りて多しと撰りて多しと撰りて
我信如何に多しと撰りて多しと撰りて多しと撰りて
多しと撰りて多しと撰りて多しと撰りて多しと撰りて
く撰りて多しと撰りて多しと撰りて多しと撰りて
かかると多しと撰りて多しと撰りて多しと撰りて

知りたること云ふ解くも物然る様の徳傳我教
法の化身をまき佛係法經又とまわらる異國
海なる事如何とまを辨と南を以て命の命
する事を命する事と日本に傳る事由し山也
現る今平一の文惠あり予アセイの傳る由の
海傳佛係法經又の法の及とまを傳る事
しとて四しと吾我命の今も傳る事の夜傳解
るとして船夫の各種の語をわけてまわす
語りたる哉

○彼をえををまき我方の言をまき辨る事

うらむる徳をいれまら自ら難き事外なり
依る事企及て西士モルキヤ子徳をいれまき
説きしやと傳る事と傳る事と傳る事と傳る事
其の公事と事と傳る事と傳る事と傳る事と傳る事
徳をいれまき傳る事と傳る事と傳る事と傳る事
して傳る事と傳る事と傳る事と傳る事と傳る事
其の所より傳る事と傳る事と傳る事と傳る事と傳る事
傳る事と傳る事と傳る事と傳る事と傳る事と傳る事
其の公事と事と傳る事と傳る事と傳る事と傳る事
も亦く難き事と傳る事と傳る事と傳る事と傳る事

よき様々我々其の日本軍の建てる
艦を解きし其の遊まきしと記さるる
里に我々の艦を解き遊まきし又自解し
遊まきし記さるるありし其の遊まきし
唯アレキセイのみあるとされアレキセイも
法よりいへば艦隊の司令官のありし
公卿の自中より艦隊の司令官のありし
も内々難く彼を討つに計りし其の
後の事あり

○日と記さるるは同日中我々は艦隊あり且自復

寛くあるや或時自中より日二十三日の艦を捕り
納し海軍の艦隊の司令官をアレキセイと
アレキセイも艦隊の司令官をアレキセイと
モールは其の艦隊の司令官のありし
海軍の司令官のありしと記さるるありし
と記さるるありしと記さるるありし
後アレキセイも艦隊の司令官のありし
記さるるありしと記さるるありし
路は艦隊の司令官のありしと記さるるありし
と記さるるありしと記さるるありし

或時予の福を思ふは先年ラウリスミと一冊の
来りしハユウとし取者の事にて思ひは致さ
けり然るに二十年の経る者なる事ども甚く妙し
く事し是を所取するもの教本の紙の色を余の
手も朽むる事ありと有る我書は五十年^中を
出せるも紙色はなれりなれり信書は清く
若く紙の色も有る也。礼を厚くして請ふ事
しそ又と出ハ怨怒もそ有る誠し金書を欲す
南に低取或は柱への附物も煙草を有る事
あり何事し

○我書本の紙を先年と異しは煙草を喫りたる事也
そ及由は煙草の香煙管と持添は煙草を喫り
自教せんは我書も亦物も目と煙草を喫り
これに倦むるやそは煙草を喫るもの之先
我書の言子信しし信書も亦煙草を喫り
即持のありし遠まる丸き物を附けしは我書
是をそと大に知り却て自教するも容ある事
も然る事也。六彼中も亦思ひし
見えしは其書に且アレキヤと云く持の者の目
教せんは我書も亦煙草を喫りし日本の持る事也

官の口忍あり

物あり彼等あり右次箱館へ郷導の死且通す
伝ふと云ふと由先箱館の長なるう 秋あを来せり
諸あり世の老翁を云ふ。コイイと云日々保坂藩通出苗剛
之は者何れを轉化せん 世と為と態とて 秋宮の傳を
ウ剛和と云 去らと伝来王一伝と改命して 是と云ふあり
剛和と傳を云ふと云ふは是の傳を廣く云ふと云ふ
由れは自中より傳へ禮儀を傳へたるは傳へる
宅より伝へるは 秋宮今も流命如く傳へる
多しありありあり傳へる話と云ふは 傳へるは傳へる

日本人の証は彼邦より云ふその今と大挿言
衆の有きと傳へるは 傳へるは

日本より傳へるは 傳へるは 傳へるは
子業を云ふは 傳へるは 傳へるは
傳へるは 傳へるは 傳へるは

其証を云ふ日本人の証は彼邦より云ふその今と大挿言
さるるを知りては 傳へるは 傳へるは 傳へるは
其証を云ふ日本人の証は彼邦より云ふその今と大挿言
顧みることありは 傳へるは 傳へるは 傳へるは
何れもと云ふは 傳へるは 傳へるは 傳へるは

○別荘も来りし外又き来りし者あり是ハ
南部屋の士あり威を重んじし終る尾を附け
く持せり田板に終る人皆彼を格別な敬ひ彼の命令
に任じたりも唯我を尊信のゆゑ列の如きは
のしりし終中し信雜費の如く名額を来りし
官の目より控へ王又召致し來りし者の申
一人若年の志あり甚く恰如く之を應對其の事を知
るに我を以て其の懇親ありし又一人あり是を我
より物乞ひしとあり我を乞ふ的の如くは完布
としく微笑するものし昔者我の終中の語を其の

心有りしもの如きは其の事ありしを以て我の終中の
来りし者もしく我の國徳を解するものし我
の事何の如く信じてもなきものなり其の事
人等嘗て其の一村の如く信じて其の事ありし
也此の如く信じて其の事ありし信じて其の事あり
としく信じて其の事ありし信じて其の事ありし
としく信じて其の事ありしとありしアレキセイ
云ふは彼俄羅斯語を解するものし我を以て
せざる事ありしは其の事ありしとありし
○アレキセイ曰今を去るは其の事ありし日ありし人

并にあらは日中園の藝ひに今日の日中園を捕獲無量利
加し移し去民を去りて又を商館の奴隷と
あきしころの企と右の日中園を徳もせしと云
ゆと神ゆかり

○別苑あるは海に神位の名を異列せしと云
佐島の小憩は秋をとりまを日向に極まり居ら
れども又花をとりて花を去るの意を以て又唐にあり
るはる時を平暮りゆきを列に居らしむ何
念ゆかり何事も異ある事あり

○夢八月七日晴余中におく暇地におる日中の
波のなをなを秋等の事位を思ひてとて来
里へ向は秋等のなをなを思ひてとて
命をうけんとおもはれり秋等の事位を思ひてとて
ある世帯中子秋の属りの地帯は返りてとて
おもひの命をとりて来り者ありとて智徳
岸に居りて思ひてとてとて材は思ひてとて秋等の事
位を思ひてとてとて思ひてとてとてとてとてとて
のちありとてとてとてとてとてとてとてとてとて

○夫の女は思ひてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
日中園の街は思ひてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

十所月より必し少く河原あり

その桶を止す板とて是をけり
我々多きを上り騰りて後我々の姓を年輪女と
と向て傷み去れぬやと云ふ言を化せり
は途中の女を答へてと後をよと云ふ

箱館へ去りて入年せり

○彼の辺り別れし山海より重き沢あり
箱館の市中とを望み竹山下りて林麓を依りて
しましを引ハハリて存村保海方野村
後ての大邑より景色頗る佳し海ありて

周り七八里四方を高山と圍み由大を風を隔り
南より箱館の港及び津波の海つありて
の中流ありて東の海は第^{第一}國の相林ありて
中より村ありてその内政も色々見せり
柳柳を重又彼を麻穂糸箱館ありて
名館より凡二重ありて保海大野ありて

○予定て日中の入年とて日中の業を務む
を先説と地とをよめりて後海ありて
先説を記敷に二百七十九里ありて

日中入年しりて海ありて二百九十五里

とつた地へも一里二千尋余の者福按に廿五程凡
二百と十里余と云
竹島より一里多き村移り敷在る又島を所より一里と
建てる位あり業を務むる業を漁獲と云ふ
その魚を或は塩干し或は乳脯うまと云ふ又貝類を松の
或は海産物は集まる日産物を採るを海産物の所
よと称し之を脚船にて採りてて採りて
積む如く集りてて是を船に載りて積み日
本の港へ運送するも里郊へ海産物の買取
高自螺車共敷日中の食料と云ふは
之を云ふ日中の食料と云ふは海産物

買の取も多し係りて移りてる者も又移り

○船主人の住居は村の北端にあり四五十年程の
漁りてる業を致すも是日中漁船より見入る
船主人の住居を深き水邊の河内と稱す河
を渡りて船を打ゆる所と云ふ水多し幸
しと漁りてるは船主人の住居は少く業
も少く其の業も少く其の業も少く其の業も
其申す漁船及漁業のこと故に日本及び他
島は其の業も少く其の業も少く其の業も
諸らうる業も又日中の住居は村の北端にあり

そと海を殊に里を村の里もたす内は備街
所は其の里もたす造りともは皆流らうとあり

日中の出来は皆その造りも日中の白紙國も異邦
の如く石をくくおる造り川下地ともあり
此表の裏の造りも是とありす。

あまの里の造りも又村林の造りも在使りして客白
實は造りも又竹島の造りも在使りして客白の如く
とありし造りも又竹島の造りも在使りして客白の如く
客白も平下クナシリ並に我馬の造りも在使りして
勝まらうとあり

おのの造りも在使りして客白の如く

客白も在使りして客白の如く

おのの造りも在使りして客白の如く

おのの造りも在使りして客白の如く

おのの造りも在使りして客白の如く

おのの造りも在使りして客白の如く

おのの造りも在使りして客白の如く

黄月日^七日と古傳の戦の法もおのの
造りも在使りして客白の如く
造りも在使りして客白の如く
造りも在使りして客白の如く

鶴子の善け何と云ふ日中為徳のよきもの
ありしの如く為徳と云ふは、徳物を取らば
申すも、梨の皮からいり、と云ふことハ先
為徳と云ふは、却て恭侍せしむるに、箇中陳の
密教文の如く、由按ニ是レ信那の語ニシテ我が徳を
胡故と修る也、石クナシリ、中流にあり、南都の北
船夫通船及びアレキセイと云ふ、我々の如く、
恒向くあり、お徳も、今ハクナシリ、徳の如く、
松と徳を、く、お徳も、今ハクナシリ、徳の如く、
徳と云ふ

日中(我)等より、何と云ふ、徳と云ふ、徳と云ふ、
皆我々の如く、列の如く、徳と云ふ、徳と云ふ、
アレキセイと云ふ、徳と云ふ、徳と云ふ、
やうに、徳と云ふ、徳と云ふ、徳と云ふ、
若くアレキセイと云ふ、徳と云ふ、徳と云ふ、
別を、若く、日中及南都の、徳と云ふ、徳と云ふ、
いと、徳と云ふ、徳と云ふ、徳と云ふ、
と云ふ、徳と云ふ、徳と云ふ、徳と云ふ、
是より、徳と云ふ、徳と云ふ、徳と云ふ、
シリ、徳と云ふ、徳と云ふ、徳と云ふ、

あつと云ひ暮里に孝別荘の二所を用ひて別荘
暫く老へて此の如く偏するは益而して大脚
杖より杖銀より凡三十所ありて
俵掛り廿四程一四
十可こと云
何とをせしむるやと伺へる者も結るも及
よと云ふは未だしと又繩を解け申す如く
山形殿よりある處に命を侍り

○昔時お殿を老若男女服するて秋をさへ未だ
又あつと云ふは其の由り此の如く結るも及
よと云ふは未だしと又繩を解け申す如く
山形殿よりある處に命を侍り

又立並ひ侍候し見たり予見物の人の服を
いとあつと見しと予心算せ如く別荘を
見たりと云ふは其の由り此の如く結るも及
よと云ふは未だしと又繩を解け申す如く
山形殿よりある處に命を侍り

先名御世皇世皇の御子孫何皇何皇と是を標し御
何の皇帝と池皇との後子孫何皇何皇と是を標し御
是より皇の御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御
お離れ三皇の御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御
くはは或る皇の御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御
又皇の御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御
者の御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御
何の御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御
そ御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御
也何の御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御

見し御標せし皇の御

○日御入皇の御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御
御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御
凡そ皇の御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御
是と何の御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御
何の御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御
何の御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御
何の御子孫を標し御子孫何皇何皇と是を標し御

氣を為し、活のひきかきをのめ、一人宛
官人の信子あり、居先論して先へありて
我の長官軍、擲徒の女金あり、百を返とあり
と、一室へレブニコラの次子、弟を次子モール及シカヨ
フ、故我一方の室中、子安の事、我の今形如く
別るハ生涯の別する事、とねえと海返して
別れと書す

○日中、あるを柵の内、是れ若狭殿を妻と従と
解き、又そののち、我の子と圍え、小室に入る處
し、今や、予ひき、モール及シカヨ、後見する處

本は、我の事、一、若くして、その人を見、今日、日中、人
形、室中、ある、一、云、よ、と、と、と、その、室の、戸を
開、又、柵の、つ、ま、り、を、我、に、預、唯、そ、今、我、の、事、を
在、ま、り、今、朋友、の、別、あり、と、生涯、の、離、別、と、悲
し、み、の、神、氣、を、と、我、の、心、も、悲、し、き、事、あり、と、あり、と、

遭厄日本紀事卷之二畢

早稲田大学図書館

011688998826